

説教 「イエスの涙、心のざわめき」

聖書 詩編 126:5~6/ヨハネによる福音書 11:28~37

「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる(詩編 126:5)」。悲しみや苦難の「涙」は、実りや成功といった「喜びの歌」の反対、だと思いがち。いや、涙と喜びは、隣り合っているらしい。

「種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は、束ねた穂を背負い、喜びの歌をうたいながら帰ってくる(126:6)」。詩の背景にはバビロン捕囚からの帰還(126:1,4)があるのだろうか。

歴史の現実には蹂躪されながらも、人の命運を超えて神が働き、「収穫」をもたらし、私たちは喜びの歌をうたう。

「イエスは彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮した(ヨハネ 11:33)」。そして「イエスは涙を流された(11:35)」。

えっ、イエス様はもらい泣きするのか、と意外な感じがする。私たちばかりか、居合わせたユダヤ人にも印象的だったようだ(11:35)。それでは彼らが言うように、愛するラザロの死が悲しくて泣いているのか。これは何やら謎めいている。

確かに「泣いているのを見て～涙を流された」のだから、イエスの心のざわめきはマリア(11:32)やマルタ(11:21)の嘆きに応じてのことではあろう。とりわけマリアは、「イエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し(11:32)」、わっと泣いた。

憐れみ深いイエス様だから、つられてもらい泣きしてしまったのか。ここからイエスの心のざわめきが、くり返されることに注目したい。

「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。〔父よ、わたしをこの時から救ってください〕と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ(12:27)」。十字架のことで心がざわめいておられる。

「イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言された。〔はっきりしておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている〕(13:21)」。十字架の心のざわめき、あの涙と関係があるのか。

イエスはマルタに「わたしは復活であり、命である(11:25)」と告げている。その復活の命が十字架にむかっていく。人間を支配する「罪」、人間を捕えて離さない「死」。十字架はそれらの具体的な徴。罪と死の十字架にむかっていく命が、イエスにおいて心のざわめきとなり、涙となっている。

マルタやマリアの懇願はほとんど叫びであった。イエスは、彼女らの叫びを御自分のこととし、憤りを覚え、興奮し(11:33)、涙を流された(11:35)。これはまさに、死にむかう命の姿ではないか。彼女らの兄弟ラザロを死から解き放つ(11:43)命の歩みではないか。

だが復活には闇の力が働く(12:10~11)。人間の罪と死は十字架を引き寄せる。そのためにイエスは心騒がせ、涙を流し、そこへむかっていく。

「涙と共に種を蒔く人は、喜びの歌と共に刈り入れる(詩編 126:5)」。詩人の言葉は、十字架と復活によって深められ、驚くべき響きとなっている。

イエスは「私の涙」を御自分のこととして流され、私はイエスの「復活の命(ヨハネ 11:25)」に与り、「喜びの歌と共に刈り入れる」だろう。甦ったラザロのごとくに(11:44)。

ラザロは世において再び死ぬが、この出来事は復活についての「表現」なのだ。

マルタとマリア、村のユダヤ人らは泣き(11:33)、イエスも泣いている(11:35)。泣きながらイエスの力を値踏みする者もいる(11:37)。泣いている姿は一樣だが、中身は大分違う。ここは、おもしろい。



《おまけのひとこと》

十字架へ歩み進んでイエスは涙を流す 涙 フーテンの寅さんを観てホロツとなる私のそれと何が違うか 愛と弱さ 混じり具合や濃度は歴然と違っても 涙の出処は違わない 心と 二つの涙腺